翻訳　ノイブルガー，自然治癒力学説史，第3章　18世紀における自然治癒力説（四分の第一），

細　見　博　志

Übersetzung von Max Neuburger: Die Lehre von der Heilkraft der Natur, 1926, Kap.3, Die Lehre von der Heilkraft der Natur im 18. Jahrhundert(1. Viertel), S.59-75, übersetzt von Hiroshi HOSOMI

【凡例　この翻訳はウィーン大学医学史教授，医学・哲学博士，マックス・ノイブルガー（1868-1955）著，時代の変遷における自然治癒力説，1926（Die Lehre von der Heilkraft der Natur im Wandel der Zeiten, 1926, Verlag von Ferdinand Enke/Stuttgart, von Dr. med. et phil. Max Neuburger, o. oe. Professor für Geschichte der Medizin an der Universität in Wien），の第3章（「18世紀における自然治癒力説」）を四分したうちの第1分冊，原著59-75頁，を訳出したものである。ここでは18世紀前半で，体系医学派の三大家といわれている，オランダで物理化学折衷派のブールハーフェ，ドイツの機械論派のF. ホフマン，同じくドイツで生気論派のG.E.シュタール，を対象としている。原著第2章（「16，17世紀における自然治癒力説」）の後半は，17世紀後半のシデナム，医化学派のシルヴィウス，ボイルなどを論じ，本紀要先号（『言語文化論叢』第8号，2004年3月，169-201頁）に訳出した。原著第2章の前半は主として16世紀前半のパラケルススと17世紀前半のヘルモントを論じており，『金沢大学つるま保健学会誌』，Vol.26, No.2, 2002, 139-154頁に，序章，第1章（古代・中世）は同誌，Vol.25, No.1, 2001, 7-22頁に，掲載した。原著は序章と本文全4章，索引4頁を含んで212頁であり，今回訳出したのは原著頁数で全体の12分の1弱にあたる。

原文ゲシュペルト（隔字体）は<…>，原文引用符（"…"）は「…」，で示した。地の文はドイツ語であり，引用でギリシャ語は[Gr.]，原著頁数は[S...]として，示した。ラテン語引用文に関しては，正確を期するため，まずラテン語をそのまま掲載し，日本語訳はそのあとに付した。原注は本文の該当する箇所に*で示し，その段落の切れ目に小活字で挿入し，その後一行開けて次の段落を開始した。訳者の補足と註は，[…]で括って本文中に繰り込んだ。

今回もラテン語引用文全般にわたり，西洋古典学を専門とする方のご協力を得た。また冒頭のモットーに関して金沢大学教授の安村典子先生のご教示をいただいた。記して

ここに感謝を表する（しかし誤りがあればすべて細見の責任である）。不明箇所や誤読について，読者のご寛恕とご指摘を乞う。】

Opinionum commenta delet dies, Naturae judicia confirmat.--Cicero, de natura deorum.
（年月は、人間の思いつきの数々を消し去り、自然の判断をより確かなものへと変えていく。——キケロ［前106-前43］，神々の本性について［山下太郎訳，キケロー選集，第11巻，91頁］）

oute physis hikane ginetai aneu technes ater oute pan techne me physin kektemene[Gr.].--Stobaeus, Serm. 58.
（自然は技術がなければ、それだけでは十全なものとはならないし、また自然を取り入れない技術もまた、十全なものになることは断じてない。——ストバイオス［5世紀の新プラトン主義者，詞華集で有名］，説教，58。）

Nulla secta est, quae omnia vidit, nulla, quae non aliquid ex vero.--Grotius.
（すべてを見通す方法などないが，真実から何かを見ない方法もない。——グロティウス［1583-1645，オランダの法学者，自然法の父，国際法の祖，と呼ばれている］。）

［第3章］18世紀における自然治癒力説

17世紀において自然治癒力の問題が様々に議論される中で，〈自然治癒過程〉の本質を理解する〈三つの基本的な見方〉が有力となってきた。一つはシデナムによって強調された〈ヒポクラテス的見方〉であり，二つはヘルモントによって主張された〈唯心論的な（spiritualistisch）見方〉であり，三つは〈機械論的な（mechanistisch）見方〉である。

［シデナム派の人々にとっては］「自然」という概念はヒポクラテスに結び

つき，ヒポクラテスの意味で医者たちによって用いられたが，その実，概念として明確になったことはなかった。また「自然」は生命現象の総体を意味するのか，動かす力を意味するのか，それともその両方か，ということをはっきりさせることに人は消極的であったが，それも当然であった。［他方で］唯心論者たちにとっては，「自然」とは身体と不滅の魂との間に存在する生命原理（Lebensprinzip）であり，時には霊魂に似たもの（psychoid），時には物質的なもの，と考えられた。［ヘルモントの用語を使えば］植物霊魂（anima vegetativa），原力（Archeus），（炎のような）生力（spiritus vitalis）などといわれた。［さらに］唯物論者にとっては「自然」は身体と同じであり，何かの障害が生じたらそれをある程度自動的に除去する能力を備えた，極めて技巧的な構造の機械であった。17世紀に様々な自動機械が作られたことや，水利術で大きな進歩があったことなどで，身体と機械の類似がいかにももっともなものと思われるようになった。たとえばボーン（Bohn）［1640-1718，解剖学者，ライプティッヒ大学教授］は次のように述べている（前述S.56参照）。 si praeprimis ponderemus, quam stupendas hodie aeque ac olim ars produxerit et producat operas taumaturgas, ordinaria et vulgaria v. g. horologia, machinas hydraulicas, pneumaticas etc. motuum varietate longe antecellentes, talium etiam, quos homo v. g. barbarus et qui nullum unquam ejusmodi automaton conspexisset aut ejus structuram penitiorem cognovisset, pro motibus vitalibus et animalibus haberet.（ごく初期のものと比べてみるなら、技術がこれまで作り出し今日も作り出している作品はなんと驚嘆すべきものであろうか。そうした作品は、たとえば時計や，水力や風力を利用した機械といった普通の一般的なものを，動きの多様性において遙かに凌駕しており、その動きたるや，たとえば未開人のような，かって一度もそのような自動機械を見たことがなく，その内部の構造を理解することもない人なら，きっと命と魂があると思いこんでしまうような動きなのである。［taumaturgasの意味不明］）

これら三つの根本的な見方に対応する18世紀前半の医学界の代表者たちは、臨床家として〈ヒポクラテス主義〉に誰よりも一番近かった〈ブールハーフェ〉（Boerhaave）［1668-1738，オランダの医学者，ライデン大学教授］、自らはあ

る種の活力説（dynamistische Prinzipien）を容認しながら，それでも機械論を強調した〈フリードリヒ・ホフマン〉（Friedr. Hoffmann）［1660-1742，ドイツの医学者，ハレ大学教授］，通常〈霊魂論〉（Animismus）の教説を立てたと言われるシュタールStahl［1660-1734，ドイツの医学者，化学者，ハレ大学教授］らが存在した。

[S.60]　〈ブールハーフェ〉は医力学説（Jatromechanik），特にピトケアンPitcairn［1652-1723，イギリスの医学者，医物理学派］のそれ，から出発したが，早い時期にシデナムの考え方に引き寄せられ，解剖学的，生理学的な研究結果や物理的，化学的な認識を，臨床での冷静な観察やヒポクラス主義の治療方法と調和させようと努力した。病理学者として彼は機械論的な説明方法に惹かれながら，医者としては慎重に〈目的論的な〉見方を採用した。たとえば熱病による体温上昇を血管壁の摩擦として，脈拍数増大を毛細血管における抵抗の増大として，説明したりしたが，ブールハーフェにとっては実際上〈発熱は自然に備わる治癒努力〉であり，必ずしも否定せねばならない現象ではなかったのである。<Febris...saepe sanationis optima causa.--febris saepe medicamenti virutem exercet ratione aliorum morborum.>--（Aphor. de cognscend. et curand. morb. sect.558, 589）.（熱病は…しばしば健康の最上の原因である。――〈熱病はしばしば薬の力を他の病気のために用いる。〉『疾病の認識と治療に関する箴言』558節，589節）

熱病性の治癒過程を医者がわざと発生させることがのぞましい場合もある，と〈ブールハーフェ〉は考えていた。彼は，「間歇熱を追い出すのも惹き起こすのも同じくらい容易にできれば，私は最も偉大な医者となるだろう」と語った。時に見られる〈マラリアの治癒効果〉について，彼は『箴言』の754節で次のように述べている。Caeterum [febres intermittentes], nisi malignae, corpus ad longaevitatem disponunt et depurant ab inveteratis malis.（他方で［間歇熱は］，もしも悪性のものでなければ，体を長命に保ち，体を古い病から清める。）癩病に対する治癒効果については，Consult. repons. med. Vol.II, cas. 19 u. 21参照。

ブールハーフェの弟子で経験豊かな注釈者である〈ファン・スヴィーテン〉（Van Swieten）［1700-72，ライデン大学講師からウィーン大学に移り，古ヴィ

ーン学派を形成］は，上に引用したブールハーフェの言葉に彼の説明を次のように付けている。Durius forte apparebit nonnullis, febrim, cum morbus sit, sanationis tamen morborum saepe optimam causam esse. Nihil tamen magis verum est et certissimis observationibus ab omni tempore confirmatum.....Non ergo semper perniciosa febris est; <errantque illi, qui hanc ubique omni artis molimine debellandum credunt; cum saepe natura per febrim vincat tales morbos, qui ad optima quaevis remedia rebelles manent.>（Comm. in H. Boerhaave Aphor. T. IV, sect.558）（病気の時に発熱は病気の治癒の最高の原因である，ということは多分少なからざる人々にはなかなか理解しにくいことのように思われる。しかしながら、これ以上の真理はないのであり、あらゆる場合に確かに観察されて確証されたことなのである。…従って熱病は必ずしも有害とは限らない。〈いつでも医術のもつあらゆる努力を傾けて発熱を打ち負かすべきだと考えている人は，誤っているのである。しばしば自然は発熱によって，どんな最高の治療薬に対しても抵抗しつづけるような病気を打ち負かすのであるから。〉（『H.ブールハーフェの箴言への注釈』，IV巻，558節））.....Neque, credo, negabunt attenti ad haec medici, quod post quartanas febres, nullis validis remediis turbatas, sed bona diaeta et verno tepore sensim solutas, firmiora fuerint inventa hominum corpora et morbis longe minus, quam ante, obnoxia.（さらに，このことに対して注意深い医者たちならば以下の点を否定しないであろうと私は考える。すなわち、四日熱にかかったとき，熱が何ら強力な薬で刺激されず，よき食事と春のような暖かさで次第に解きほぐされるならば、病気の後には，患者の体は以前よりも丈夫になり，病気に煩わされることが以前よりもずっと少なくなることが分かる，ということである。）　ファン・スヴィーテンは〈三日熱と四日熱の浄化的な効果〉を，自らの経験と様々な引用（ヒポクラテス，フォレスツス（Forestus），ファン・デア・マイ（van der Mey），科学アカデミー　1718年，110頁）を交えて論じている（Comm. T.V. sect.754）。痙攣，頭痛，肩痛，心悸症などの治癒効果が論じられている。ブールハーフェの上述589節への注釈から明らかなように，強い芳香剤を投与したり，擦り込んだり，大量に瀉下剤や嘔吐剤を用いたり，精力的に発汗治療を行ったりして，血液循環を促進し，心臓の作用を上昇させる

のはすべて，〈わざと発熱を引き起こす〉治療法に数えられているのである。

[S.61]　〈ブールハーフェ〉は自然の業の多様な表現に畏敬の念をもち，自然の業への障害を除去して，やむを得ない場合にのみ病気の進行に介入するということを，医者の本務と考えた。1731年の学長就任演説で，自然の業の多面的で計画的な働きを見事に叙述している（De honore medici, servitute『医者の名誉――奉仕』）。

その演説から何カ所かを抜き出してみよう。

<In sanandis tandem morbis principatum obtinet Natura>, quae vulnera pura cito consolidat, et ossa fracta, si minister Medicus peregrina sustulit, separata in situm naturalem reposuit, atque aptata, quiescentia et humecta detinet. Ulcera depurantur solo genito pure, solius Naturae sobole. Quid sanat inflammata? sola Natura febre resolvens, suppurans, aut separans. Natos tumores vitalium humorum circuitu, si sanabiles, discutit aut digerit. Ars Naturae propositum sequendo, calore, emollitione et fricatione adjuvat. Si his non cedit, ferro tentatur vel igne, malum aut immedicabile non attingitur. Fracta, luxata, separata, aut propiis elapsa locis, rara valet natura reponere, quippe victa. Ars vero vias naturae calcans, exercitata dextra situm reddit pristinum disjunctis et, dum caute retinet quieta, ceterum deinde natura sola perficit; qua deficiente, reponit frustra artifex; fractum semel os in cadavere non unitur. Laboranti tamen naturae evidentius nunquam ab medico succuritur quam in vulnere, fractis, luxato, elapsis, plethora et violenta inflammatione.（〈要するに病気の治療に際して指揮を執るのは自然である〉。自然は化膿していない創傷をすばやくふさぎ，骨折に際しては，従者である医者が大きく外れた骨を支えてやれば、その分離した骨を自然な場所に戻し，さらに接がれた骨を安らかで湿った状態に保持する。潰瘍は純然とただ1人の息子，唯一自然の子孫により浄化される。何が炎症を癒すのか？　唯一自然のみが発熱で［炎症を］排除し，抑え，分離する。［自然は］生じた腫瘍を，生命力ある体液の循環によって，治療できる場合には，破砕したり放散させたりする。医術は自然の提案に従って，発熱，下痢剤，摩擦などで援助する。それらでもって［腫瘍が］治らないなら，鉄ないし火が試され，害毒や不治のものが触れないようにする。骨折，脱臼，骨の

分離，また、本来の場所からの外れた骨を，自然はまれに元に戻すことができないことがあるし，もちろん全くだめな場合もある。医術が真に自然の道を歩むとき，修練した右手で，外れているものに元の場所を与える。そして用心深く安静にしていれば，その間に自然が残りのことを一人で完成する。［自然が］衰えているときは，どんなに立派な医者でも元に復させることはできない。死体ではひとたび折れた骨はつなぐことはできない。苦労している自然は，医者によって援助されるが，それがよりはっきりと現れるのは，創傷，骨折，脱臼，骨違い，多血症，激しい炎症などの場合である。）

Sed ad modos sanandi naturae consuetos, artisque fortunatos veniamus. Vix alieni quid natum in vivente aut extrinsecus in illud susceptum, furtim licet, ipsa statim fabricae conditio, falli nescia, motus excitat ad expellendum, quod mora noceret; ad mitificanda aspera, resolvenda spissa, ad dissoluta nimis cogenda. O qnae[ママ] molimina vomitus aliarumque expulsionum per alvi, vesicae, cutis vias quae excitationes attractionesque humorum ad sedem mali, ut diluat, abluat, detergeat, leniat, proturbet noxiam!（さて通常行われる自然の業の治癒のやり方と医学の幸運な治癒のやり方に言及してみよう。生体の中に外的なものではない何かが生じる、あるいは外部から、こっそりとではあれ、何かが生体の中へ取りこまれるとする。すると自然はすぐさま工場のような状態になり、誤ることなく、そうしたものが時間が経ちすぎたために有害なものになっているのを追い出そうとして、運動をかき立てる。つまり、激烈なものを和らげようとして、濃密なものを分解しようとして、極度に凝縮したものを解きほぐそうとして、そうするのである。下腹部や，膀胱や皮膚などの出口を通ってなされる，嘔吐の苦しみや他の排泄の苦悩はなんたるものか！　それは、有害物を分解し，洗い落とし，ぬぐい去り，沈静化し，追い出すために，体液がかき立てられ，害悪が巣くっている場所に引き寄せられているのである。）

Qui febriles impetus, ut expellant, enervent, inveratant, maturent, assimilent materiam peregrinam mali; vel ut secernatur sincero quod corrigi nefas; denique ut novis turbata, dein iisdem ferendis natura assuescat. Id nempe eximii tenet febris, ut ipsa febre idonea fiat impune admittere postea, quae prima vice laeserant, quod pestis, fer-

vidae pustulae, vari ulcerosi, ipsa venena, docent.（それは発熱による攻撃なのであって、その攻撃は全く外的なものである有害物質を駆逐し，弱体化し，裏返し，急がせ，同化させようとする。あるいはその攻撃は，正すことのできない真摯なものによって消滅させられる。結局のところ，自然は新たに熱が生じるどかき乱されるのであるが，そのうちその熱に耐えることに慣れるのである。熱によりきわめてはっきりと分かることは、自然は発熱によって，最初は損傷を与えるものであったものを後にはすんなり受け入れられるようになるということであり，このことは疫病や，湿疹，潰瘍性の吹き出物、また毒素そのものが教えてくれる。）

<Febrim laudamus medici instrumentum felicissimum, quo natura perficit mille morborum acutorum et diuturnorum, aliter incurabilium sanationem perfectissimam>. Febre, natura data, medicus utens, eique diluentia blandeque resolventia sufficiens, praestat salutifera. Medicus naturae gnarus, ejudem imitator, impari ad chronicos naturae succurrit, suscitata febre pre artem, quam ciere ipsa impos erat. Quibusnam ad haec utitur? attenuat, calefacit, dolores ciet, exercet, fricat, fovet, movet, rubefacit, victu, medicamentis, manu, ut febrim creet laboriosus, qua ingeniose directa languentem erigat naturam, durumque frangat morbum. Ut enim in acutis impetus hostile maturatum, subactumque, per abscessus, metastases, evucationes proturbaverat, vias parando saepe occultissimas, soli illi intellectas, neque ulla sagacitate, nisi naturae indicio praevidendas. Medica facultas, fida illius pedisequa, pares motus, coctiones, separationes, cuniculos exsilia, proscriptiones molitur, ut aegrotantes liberet. Horumque tanto felicior eventus, quo minus distiterit vera naturae praemonstraione....（〈発熱は医者の最良の道具であると我々は賞賛する。自然は発熱という道具でもって，それ以外の方法では治療しがたい多数の急性病や慢性病を，完全な健康状態にまで治癒させる〉。発熱が自然によって与えられると，医者はこれを利用し，緩和させるものや穏やかに解きほぐすものをその熱に補助として与え、健康状態を成し遂げる。自然に精通した医者は，自然を模倣し，慢性病に対して劣勢になっている自然を助けるが，その際，自然自身ではかき立てることのできない熱を，医術によってかき立てるのである。このために何を

用いるのだろうか？　医者は弱め，温め，苦痛をかき立て，追い立て，摩擦し，熱し，動かし，赤くし，その手段として，食料，薬剤，手などを用いる。それは苦労して発熱を作り出すためであり，その熱を正しく導くことによって，力を失っている自然を力づけ，重い病気をうち砕くのである。危急の場合，その攻撃は進行し完成している敵対的なものを，退去，除去，呼び出しによって追い出す。その際に用意する道は，しばしばきわめて気づかれにくいもので，それだけが知っているものであり，他ならぬ自然の申し立てによって鋭敏に予見される道なのである。医者の能力は，患者を［病気から］解放するために，自然の忠実な下女として，適切な運動，煮熟，分離，隠れ場の穴を作ること，追放，を行う。それが自然の真の予示から遠く離れていなければいないほど，それらの営みはそれだけうまくいく。）

[S.62]　ヒポクラテス，ガレノス，シデナム，そして〈ブールハーフェ〉といった偉大な巨匠たちは，自然のもつ治癒の業を常に顧慮して治療を行ったという点で共通しているが，その共通性を〈バーカー〉（M.J.Barker）は明らかにしようとし，それによって自ら自然治癒力（Vis naturae medicatrix）の重要性を強調した。彼の『古代と現代の医者の同意に関する試論』（ロンドン，1747年）は仏訳もされた（アムステルダム，1749年）。

ブールハーフェ自身は「自然」の支配をきわめて一般的に指摘するだけで満足した。生体が健康や病気になる主要な原因を形而上学的や自然学的に明らかにするということを，彼は自己規制して行わなかったが，それは賢明なことであった。そのような究明は医者にとって必要でもないし，役にも立たないし，そもそも医者の研究にとってこのような領域で認識に到達することは不可能である，と彼ははっきり語っている。

〈ファン・スヴィーテン〉は自然概念について次のごとく表現している：

Natura(phusis), antiquum illud Hippocratis voabulum, a multis tam male explicatum, quid designat? Nihil aliud, nisi aggregatum omnium conditonum physicarum, quae requiruntur, ut vita sit constantissima, durabilissima et simul agilissima mobilitas, sed hoc est perfecta sanitas: si aliquid deest, est natura deficiens et ille defectus morbus est. Non ergo summo Numini injuriam faciunt mdeici, dum <naturae> tam multa

tribuunt; per hanc enim intelligunt <creati corporis fabricam>. (Comm. in H. Boerhaave Aphorismos de cognosc. et curand. morb. Tom I, Prolog sect. 1.)（自然とは古代ヒポクラテスの周知の言葉であり，多くの人々によって余りに誤って説明されているが，そもそも何を意味しているのだろうか？　それは他でもなく，あらゆる自然条件の総体であり，その自然条件は，生命がもっとも恒常的で，永続的で，同時にまた活発な運動体であるために必要とされるものである。つまりその状態は完全な健康状態である。もしも何かが不足しているなら，自然は弱体化しており，この弱体化が病気なのである。それゆえ，医者が〈自然〉に極めて多くの貢ぎ物をなすならば，最高の神霊に不正を犯さないことになる。つまり自然を通して医者は〈被造物である身体の構造〉を理解するのである(『ブールハーフェの疾病の認識と治療に関する箴言への注釈』第1巻，序言，第1節)。

ブールハーフェに対して〈フリードリヒ・ホフマン〉(Friedrich Hoffmann)は確信に満ちて，自然をボイルの意味での「機械」とあえて位置づけ*，技術でもって束ねられた様々の運動の総体，自動的に成立した諸力の働きと見なした。彼にとって人体は最高の完成度を示す機械であり，張力（トーヌス）を付与された緊密な組織［心臓］の規則的な収縮・膨張によって引き起こされる，血液や体液の循環こそが，生命の最も本質的な現れであった**。彼の考える所によれば，この機械はある程度まで故障を修繕することができるが，そのような，医家風に言えば病気に対する〈「自然」の治癒力〉は，なそうと思って，目的を追求して，生ずることではなく，端的に〈偶然の所産〉(per accidens)である。[S.63]確かにホフマンは医力学的考え方に全面的に支配されていたが，それでもやはり臨床における卓越した観察家であり，人体が自ずと癒される行程や〈病気の体が自助を行う有り様〉は，決して否定しようとはしなかった***。それどころか反対に，再三再四この不思議の業に生き生きとした表現を与え，〈自然治癒の業をもっと深く研究する〉必要性を強調し，自然治癒力へのきめ細かい配慮を，科学的な治療学の第一の課題と見なした****。

*ヴェーデル（Wedel）［1645-1721，ハレ大学の医化学派の生理学者］の弟子であったホフマンは，イェナで学位を取った後しばらくイギリスに渡り，その地で〈ボイル〉に

面識を得た。

**以下においてホフマンの浩瀚な業績から二，三の箇所を証拠として提示することで我慢することにしたい。

Nos cum Hippocrate naturam corporis humani principium omnis sermonis et ratiocinationis in medicina esse censemus. Per hanc vero nihil aliud intelligimus, quam perennem sanguinis et fluidorum per corpus mere tubulosum et hydraulicum, beneficio systoles et diastoles, quae in omnibus canalibus viget, progressivum et in circulum abeuntem motum.(Med. rat. systematic. Tom. III, Sect. I, cap. 4, sect. VII)（我々はヒポクラテスとともに，人体に備わる自然を，医学のあらゆる教説と推論の原理であると見なす。自然という言葉で我々が理解するのは，他ならぬ血液と体液の永久的な運動である。それは純粋に管状になっている人体をめぐる動きであり，あらゆる導管で活力を持つ収縮と伸展のおかげにより前進し，また円環的に進む運動である。(『合理的体系的医学』，第３巻，第１部，第４章，第７節)）

....per naturam corporis humani, quae secundum Hippocratem omnis sermonis et ratiocinationis in medicina principium esse debet, nihil aliud intelligimus, quam progressivum et in circulum abeuntem sanguinis et omnis generis humorum motum, a cordis et vasorum, quibus fluida continentur, aliorumque solidarum motu contractorio et dilatatorio reciproco dependentem.... His motibus recte et ordine succedentibus, vita et integritas corporis conservatur ac moribidae laesiones arcentur: (L. c. Sect. II, cap. I, sect. IV)（人体に備わる自然とは，ヒポクラテスによれば，医学のあらゆる教説と推理の原理でなければならないが，我々の解するところそれは他でもなく，血液とあらゆる種類の体液の前進的な，円環をなす運動である。その運動は，心臓や，体液を包み込んでいる血管や，他のいろいろな固体の収縮と拡張を交互に繰り返す運動に依拠している運動である。…この運動が正しく規則的に行われることによって，体の生命と統合は保たれ，病気の攻撃は防ぐことができる。(同上，第２部，第１章，第４節)）

***....evidenter ostendimus, a benigenissimo et infinitae sapientiae corporis humani opifice, ita constructas et coagmentatas esse machinae animalis varii generis partes, ut certi ac determinati motus solidorum et fluidorum progressivi simulque secretorii, depuratorii et excretorii contingant, qui non modo ad vitalem conservationem et durationem corporis in se corruptilis vergant, sed etiam summo artificio ita instructi sint, ut ubi a nocentibus rebus et causis inordinati sive morbidi fuerint redditi, illi ipsi ad submovendas et destruendus illas causas, a quibus pendent, conspirent. Et hoc est, quod veteres voluerunt et quod etiam ipsa attenta confirmat experientia,

plures nempe et graves etiam aegritudines sponte solius naturae viribus, sine peculiari medici auxilio, sanescere et naturam optimam morborum esse medicatricem (L. c. Sect. II, cap. 2. sect. I). (以下のことをはっきりと述べよう。もっとも慈愛溢れ，無限の知恵を備えた人体の創造者によって，魂をもった機械の多様な部品は，固体や液体の確固として決定的な運動——前進的で，同時に分離させ，浄化し，排泄させる運動——が生じるように，作られ組み合わされる。これらの運動は，それ自体腐敗して行く体の生命の保持と持続へと向かうだけでなく，最高の技術によって次のように秩序づけられている。すなわち，有害な物質や原因によって不順な状態や病的な状態になったときには，問題となっているかの原因を排除し駆除するために，その技術と協調するよう秩序づけられているのである。すなわちそれは，古人たちが主張したように，また注意深い経験自体も確証するように，多くのしかも重い病苦が自ずと自然の力だけで，医者の格別の援助なしで癒えるということであり，自然が病気の最高の癒し手であるということである（同上，第2部，第2章，第1節））。

****Jam quum clarissime constet, quid sit <natura illa corporis conservatrix et medicatrix>, nunc dispiciendum erit, <qua methodo, qua via>, haec ipsa natura, cujus plane mirabilis in liberando corpus a praesentibus morbi et mortis periculis vis est ac energia, hoc solenne negotium perficiat. <Nam certe cognitio hujus mehtodi, qua natura, quae infinite sapientem architectum pro auctore habet, utitur, merto vera et fima cynosura est artis medicae, quae secundum hanc leges et regulas suas medendi construere debet>, ut naturam recte agentem non turbet vel pervertat, sed potius sequatur et imitatur, vel deficientem et impeditam adjuvet atque in ordinem reducat. (L. c. Sect. II, cap. I, sect. V.) (〈身体のかの保護者であり医者であるところの自然〉とは何であるか，ということは既に極めてはっきりしているのだから，今や認識されるべきは，〈どのような方法で，どのような方途で〉，この自然は——切迫する病気と死の危険から体を解放することにおいて自然の力ないし働きはまさしく驚くべきものである——この通常の仕事を完成させるか，ということである。〈さて自然は，無限に聡明な建築家を創始者と見なしており，その自然が用いるこの方法に関する知識こそは，まさしく医学の真実で堅固な核心［北極星］である。医学はこの核心に従って，彼ら医者の法と規則を構成せねばならない〉。［医者は］正しく働いている自然をかき乱したりひっくり返したりしないようにし，むしろ自然に従い自然を模倣し，自然が衰え妨げられているときに助け，正常に戻さねばならない（同上　第2部，第1章，第5節））。

Vidimus itaque Naturam solam, saepe morbos egregie percurare, arcere et corporis integritatem

tueri. <Jam vero vehementer utique optandum esset, ut omnes, qui salutarem artem exercent, genuinam et probatissimam Naturae methodum qua morbos feliciter sanat, intimius perspectam tenerent et molimina sua ad ejus praescriptum adornarent>. In quo quidem merito laudanda veterum sententia, qui ad unum fere omnes professi sunt, medicum esse Naturae ministrum, spectatorem, imitatorem, et adjutorem, ita, ut <Hippocrates> passim prodiderit, Naturam impulsam artis peritis, quae facienda sint, monstrare nec quidquam salutariter fieri posse, nisi quod ipsi Naturae convenienter fiat, id, quod etiam <Duretus>, optimus Hippocratis commentator, urget, praestantissimum asserens artis magistrum illum esse et dici debere, qui fidelissimus Naturae imitator, observator et adjutor. (L. c. Sect. II, cap. 1, sect. XXXI).（かくて我々は，自然のみがしばしば病気を見事に完治させ，予防し，体の健全さを維持しているのを見てきた。〈さらにもっと強く確実に望まれることは，癒しの業を行うすべての人が，病気を見事に治す真の最も優れた自然の方法を，より深く洞察し続け，自らの努力を自然の指図に添えるということである〉。確かにその点において古人たちの言葉は誠に褒められるべきである。彼らは最後の一人に至るまでほとんど全員がこう公言している。医者は自然の召使い，観察者，模倣者，補助者であり，また〈ヒポクラテス〉が至るところではっきりと述べているように，自然は医術に巧みな人々からせかされると何をなすべきかを示してくれる。そして，自然にとって何か好都合なことにならない限り、健康に向かうようなことは何も起こらないのであって，その点はヒポクラテスの最良の註釈家である〈ドゥレトゥス〉Duretusも主張していることである。彼が申し立てているところによれば，最も忠実な自然の模倣者，観察者，補助者こそが医術の最も卓越した師であり，そのように呼ばれるべきなのである（同上，第2部，第1章，第31節））。ホフマンは次のように言ったがそれはきわめて正鵠を得ている: <Et licet sint, qui naturam mirum extollunt ut praeter eam nihil saepere videantur teste tamen experientia, hand raro in eo delinquunt, quod nec ipsas naturas, nec motus naturae, qui in salutem, ab iis, qui ad perniciem tendunt, solicte distinguant, et naturae opus, ad salutarem, uti putant, finem, licet incongrua ratione, directum, interpellare nolint.> (L. c. sect. XXXII).（〈自然を驚くほど褒めて，経験を証拠としていながら自然以外には何も知らないように見える人々がいるかもしれない。そういう人たちはしばしば次の点で誤っている。すなわち，彼らは自然そのものも，健康に向かう自然の運動も，破滅に向かう運動と入念に区別しておらず，彼らが健康の目的に向けられていると思えば，不適当な仕方で行われている場合でも，自然の業を妨害しようとはしないのである。〉（同上，第32節）。

[S.64]　〈しかしながらあらゆる病気の徴候に，生体の役に立つ合目的的反応を認めるという学説は，軽率にも病気の経過を治癒の経過と混同しているものだとして，ホフマンは断固として反対した〉*。彼はある種の病理的な症状，たとえば熱病による反動が，よい結果をもたらすことを強調したが，他方でしばしば熱病，出血，痙攣，嘔吐，下痢などが，まさに破壊的な影響を与える場合があることも示している**。彼はたとえば間歇熱のような病気が併発すれば，それが治癒効果をもたらすことがあることを知ってはいるが***，軽率な一般化を戒め，病的な症状がもたらす治癒効果は〈偶然の産物〉に過ぎないと説明した****。自然の業はしばしば動揺し，機能しなくなる*****，特に慢性病の場合にはそれが顕著である，と言っている******。

*<Quae cum ita sint, nemo certe, qui allata curatius expendit, facile in eorum sententiam descendet, qui haud verentur affirmare et febres et omnes hos plane morbosos motus, in se et sua natura esse salutares, ad vitam conservandam et corpus ab interitu vindicandum sapienti natura provido consilio institutos.> (L. c. Sect. I, cap. 4, sect. XVIII).（〈それがそのようであるのだから、提示されていることをより注意深く判断するならば，きっと誰も次のような人たちの意見に容易に同意しないであろう。その人たちはこう主張してはばからない。すなわち，熱にしろすべての端的に病的な動きにしろ，それらはそれ自体そしてその本性において健康に役立つものであり，命を保ち体を破滅から守るために，聡明な自然があらかじめ配慮して引き起こしたものである，と主張するのである〉（同上，第1部，第4章，第18節））。病気の症状は，生体と病気の原因との戦いの徴候と見なされるべきである，たとえば熱病の場合がそうである。Et hoc demum sensu, febris ad Celsi loquendi modum, medicina et praesidium corporis appellari, vel ut Hippocrati aliisque veteribus solenne, denominatio <pugnae naturae cum morbo>, nec non naturae optimae medicatricis, admitti poterit, <intelligendo per morbum, perniciales illos spasmodicos et kat' eksochen[gr.] morbosos motus, vincendos per maturam...>(L. c. sect. XIX).（従ってこのような意味でなら，熱をケルススの言い方に従って治療薬と呼んだり体の守備隊と呼んだりすること，あるいはヒポクラテスや他の古代人の慣例どおり，〈病気と自然――それも最高の癒し手である自然――との闘い〉という呼び方をすること，そうすることを認めてもよいであろう。すなわち，〈病気という言葉を通じて，あの痙攣を伴い特に病的な動きが破滅的なものであり，自然によって克服され

るべき動きであると理解するならば可能であろう〉（同上，第21節）［per maturam はper naturamの誤りと解する］）。

**L. c. Sect. II, cap. 1, sect. XXVIII（ある種の出血），XXIX（発熱，たとえば結核性の），XXX（痙攣性の動き，心悸症，しゃっくり，嘔吐，野獣のような咳（tussis ferina）[?]，排泄（Dejectones））。強い歯痛による痙攣，寄生虫による刺激（Wurzreiz），神経系の損傷，除去できる異物や毒物がない場合の〈嘔吐〉，肺結核の〈咳〉，などは単純に生ずる機械的で〈無目的な反応〉である。

***発熱が痙攣性疾病に，四日熱が癲と赤痢に，下痢が心気症（Hypochondie），鬱病，足痛風に，鼻風邪が頭痛，眼痛に，効果があるなど。<Ex nullis siquidem febribus nulla magis saluti hominibus est, quam tertiana et quartana, quod etiam vulgo notum est>: hae ... sanguinem egregie depurant et obstructiones circa mesenterii venas potenter tollunt nec non humores concretos, congelatos, crassos et viscidos, qui variorum spasmorum causae sunt, resolvendo auferunt, et nervos praehumidos exsiccant, nimis resolutos ac laxos firmant et roborant, unde vulgi persuasio, quod quartanae magnum robur ingenerent corpori, ita ut is, qui tertiana vel quartana fuerit correptus, intra aliquot annos degat liber et immunis ab omnibus morbis.（〈まことにあらゆる熱の中で三日熱や四日熱よりも人の健康にとって役立つものはないのであり，そのことは民衆にも知られている〉。それらは血液を見事に浄化し，腸間膜の血管の周りの障害を上手に除去する。同様に，凝固し，凝結し，濃縮になり，粘着性を帯びた体液は，様々な痙攣の原因となるが，それをさらさらにして除去し，湿りがちな筋を乾燥させ，極度に緩く伸びきっているのを固く強くする。そこから次のような民衆の信念が生まれた。すなわち，四日熱は体に大きな力を植え付けるので，三日熱や四日熱にかかった人は，［その後］何年かはあらゆる病気から解放され，病気にかからないで暮らすことができる，というのである。）

****Nulla certe alia ratione, nulloque alio respectu hi motus, per se morbosi, vocari possunt salutares, quam quod <per accidens>, licet saepius, per eosdem, alter iste, revera per se salutaris dicendus, sanguinis nempe a partibus internis ad externas tendens progressus, <mechanica quadam ratione> excitetur, augeatur ac per ejusdem appulsum, interventu mechanicorum, quibus a summo opifice machina animalis sapientissime instructa est, motuum, ipsius morbi causae; vel stagnantem materiam resolvendo, vel eandem expellendo, auferatur. (L. c. Sect. I, cap. IV, sect. XIX).（それ自体病的なこれらの動きが，健康をもたらすものと呼ばれうるのは，他ならぬ次のような理屈、次のような観点からである。頻繁ではあるが〈偶然に〉，その病的動

きによって，真にそれ自体健康をもたらすものと呼んでいい別の動きが，内部から外部に向かって血液を前進させているときに，〈何か機械的な仕組みで〉かき立てられ，また血液が動かされることによってその動きが増大する。そのとき，病気そのものの原因である機械的な動き――至高の制作者により魂を持った機械がきわめて賢明に教え込まれた動き――の介入を受ける。そして，あるいは停留している物質を解体することによって，あるいはそれを排出することによって，その動きは除去される。（同上，第1部，第4巻，第21節））

*****Non enim semper et ubique naturae vires ad restitutionem et reparationem illius, quod laesum est, sufficiunt, sed interdum plus valet docta ars quam natura. (Diss. de nat. et art. efficacia in medendo).（というのも自然の力は、傷ついた箇所の修復や回復に、常にどんな時にも十分であるというのではなく、時には自然よりも医者の業の方がより有効である（『自然と医学の治療の効力に関する論文』）

******L. c. Sect. II, cap. 1, sect. XXVI（同上、第2部、第1章、第26節）。ホフマンはここで医方法論者（Methodiker）に依拠している（S.14参照）。

[S.65]　〈ホフマンが特に力を入れて否定したのは，正常時も病気の時も目的的，意識的に支配する原則があって，体の出来事を取り仕切っている，という考え方である〉。Ad hypotheses quoque referendum esse puto, quod natura sive anima rationis, consilii, intentionis et scientiae interioris particeps, medicinae et omnium motuum, qui vitam tuentur et morbos curant, principium constituatur.--Quisque itaque clarissime perspiciet, ad motuum oeconomiam, qui vitam et sanitatem tuentur et morbos etiam depellunt, minime necessarium esse concursum entis cujusdam, quod notitia, perceptione, multo minus, quod directione gaudeat.（言及すべきだと私が考える仮説は以下のようなものである。すなわち，理性，配慮，意志，内的な知恵を持った自然，あるいは霊魂は，治療の原理、そして生命を保護し病気を癒す医学やあらゆる運動の原理として存在する。――従って誰もがはっきりと分かるであろうが，生命と健康を守り，また病気を追い出しもする運動の営みのためには，知識や理解を喜ぶ何らかの存在が加勢に加わることは全く必要ではないし，ましてや指示を喜ぶ存在の加勢などはもっと必要ではない。）

ホフマンがこのような主張が突きつけた相手とは，研究者として人間として，

考え方においても性格においても，「享楽家」ホフマンと正反対を構成する人物，「鋭く形而上学的な人」（homo acris et metaphysicus）で，若くして医学の改革者，「予言者」，を自らの天職として感得してきた人物，それが〈ゲオルク・エルンスト・シュタール〉である*。他の体系家の場合と同様シュタールの場合も，この天才的で風変わりな人物の教説を事細かに述べる必要はないと思われるが，ただ彼の場合，〈彼の自然治癒力観を説明することが同時に，彼の生命論，疾病論，医療の目的と限界に関する見解，などの基本を説明することにつながる。というのは後にも先にもないほどに徹底してシュタールは，自然治癒過程を，彼の体系の基礎とし，主柱とし，冠たる要石にしたからである〉。[S.66]この［自然治癒力という］観念に魅せられ，それを熱烈に主張しながら，彼は全思索，研究，教育，治療，著作のすべて，人生のすべてをこの自然治癒力の布教に注ぎ込んだ。もとより，必ずしも世間の承認を得ることはできない，という確信に達するのは時間の問題であったが。

*ホフマンのシュタール批判の主著De differentia intra doctrinam mechanicam et Stahlii organicam（『機械論的な教説とシュタールの人体論との相違』）は，シュタールの死後13年経って漸く出版された。

〈シュタール〉の自然治癒力観や，医学の認識と医者の治療にとって自然治癒力がもつ根本的意義に関する彼の理解は，シュタールの多数の論文に記されているが，彼の傑作である〈Theoria medica vera〉（『真正医学説』）（Hal. 1708）には，その主要な部分が収められている。

その『真正医学説』に収められている他の三編の論文の前に置かれているVindiciae et judicia de suis schediasmatibus（『彼の即興の言動の擁護と判決』）において，シュタールは自らの学問的発展を叙述し，多くの論文の主要な内容を記述している。ここでは我々の主題に特に重要な箇所に限って，ごく簡単に触れることにしよう。

論文〈Autokratia[Gr.] naturae〉（『自然の自律』）（Hal. Magd. 1696）でシュタールは先人たちの意見を紹介しつつ論じ，あらゆる生命現象は生体の保持を目指し，自発的治癒や自動的再生，組織の代替がある，という結論に達した。

「自然」とは我々の内に働く最初の原因であり，生体の維持のために必要な生命現象を導くものである，もっとも，意識や意志や一種の熟慮を重ねる場合もあれば，本能的に生起する場合もある。〈論文タイトル『自然の自律』とは，一切の人為を加えずに，分泌，排泄，栄養過程などによって，病気から自動的に解放され健康になることを意味している〉。自律とは，自らの力によって勝ち取った勝利であり，それゆえ外的な援助をまつまでもなく病気を克服した自然治癒過程にぴったりの概念である。自然救済の作用範囲には，創傷治癒や組織修復も含まれる。治癒を引き起こすのは，生体の構造とメカニズムなのか，それともさらに上位の非物質的原理なのか，という問題に関して，シュタールは断固として後者を肯定したが，しかしさしあたってその問題への深入りは避けた。自然治癒力は急に起こった苦痛を除去するのみならず，時に病気の原因にタイミングよく介入することによって発病を予防することもある。そのような予防は，たとえば自然におこる咳，壊疽を回避する〈炎症〉，あるいは〈発熱〉などによって，行われる。この『自然の自律』論文の第2章，第3章では，自然治癒の様々な例が述べられており，最後の章では医者の治療の指針が引き出されている。自然治癒力は特に体液性の疾患の場合に効果を発揮し，それに対して病気の座が特定の組織にある場合にははるかに効果は少ない，また慢性病の場合にはよくなる兆しはあってもなかなか効果は現れないことが多い，ということを〈シュタール〉は指摘している。また〈自然はしばしば動揺したり，極度に荒々しく反応したり，錯誤によって有害な結果を引き起こしたりする〉ことも，彼は決して否定してはいない。[S.67]自然の治癒の現れは，時に応じて，嘔吐，下痢，発汗，〈出血，発熱，炎症〉などとなる。医者は自然の業のなすところにいつもまめまめしく従う必要はないし，自然の業にどんな場合にも服従せねばならないというのでもないが，しかしやはり自然の業から，有害物質（Materia peccans）の種類やその動く方向を見抜くことができる。悪を除去するもっと容易で速やかな方法を医者が知っているなら，その方法を用いるにやぶさかである必要はない。

同様の趣旨は〈Diss. de medicina sine medico〉（『医者いらずの医学論』）（Hal. 1707）にも認められる。発熱論に関連した論文は幾つかあるが，その中で

〈Diss. de febris nationali ratine〉（『発熱の合理的な理由論』）（Hal. 1701）がある。これらの論文でシュタールが明らかにしようとしているのは，発熱は一般に自然が行う癒しの業から生じるのであり，通常病因の直接的な結果であり，病的だと見なしている現象が，害毒を除去するために行う，生体の自動的な反応である，ということである。害毒を除去する分泌や排泄の作用などは，血液循環を促進したり，血液を分泌や排泄の器官に送ることによってなされる。

シュタールの生命論や病気論にとって重要な意義をもっており，自然治癒力の本質に関する彼の理解を「アニミズム（霊魂論）」として強調している一連の論文は，〈霊魂の肉体への影響〉を論じている。それらの内の最初の論文De passionibus animi corpus humanum varie alterantibus（『人体を様々に変化させる霊魂の苦しみ』）は1695年に現れた。

宣言書〈De differentia logou[gr.] et logismou[Gr.]〉（『ロゴスとロギスモス（推論）の相違』）や，〈De Naturae erroribus〉（『自然の錯誤』）（1703），〈De frequentia morborum in corpore humano〉（『人体のおびただしい病気』）などの論文は，シュタール自身の説明によれば，発熱時の自然の業は理性では必ずしも割り切れない，ということを示そうとしたものであった。だからといって自然の業の影響を発熱時の症状から閉め出してしまうとしたら，それはきわめて不当なことであり，一般に〈anima rationalis〉（合理的な霊魂）を誤って理解したところに起因する。

当時の支配的な理論は，生理学的，病理学的現象を医化学的，医物理学的概念でもって残るところなく説明し尽くしてしまえると錯覚し，ちょっとでも不快なことや滞ったことがあれば，それを除去することが露骨な多診多療の目標であった。それに対してシュタールは，医学理論から非有機的な自然科学を追放し，有機体の観察からのみ生じる理念によって，治療を行おうと考えた。

シュタールにとって〈有機体は，機械（メカニズム）とは根本的に異なるものであり，体を作り上げ維持しているある非物質的な原理ないし力の働き〉であり，またこの力は固有法則性をもたらし，生命現象を統一し調和させる。体はほんらい完全に受け身的であり，強度の分裂傾向によって常に分解の危険性に瀕しているが，その分解の危険性から免れているのは，〈生命原理〉から流

出するエネルギー（運動能力）のおかげである*。

*医者としてシュタールは有機体の驚嘆すべき自動性（Autonomie）や自己規制を認めたが，他方で卓越した化学者として——実際彼はそうであったが——直面した問題は，かくも簡単に崩壊するはずの体が，耐えざる有害な影響にも耐えて，自らの統合性を保持し，一見物質配置は変わらないようなのに死後にはすぐに始まる腐敗にも，［生きている限りは］耐えるのは，どうしてか，ということであった。［自動性と統合性という］二つの様態を考察することによって，シュタールは非物質的な原理という考え方に到達したのである。ついでながら〈サントリオ・サントロ〉（Santorio Santoro）［1551-1636，パドヴァの医学教授］は彼の著書Statica medicina（『医学生力学について』［1614］）（Sect. I, aph. 80）において，生存中はどうして腐敗から免れているのか，という問題を立てており，当然ながらシュタールとは異なった結論にたどり着いた。Caro animata cur vivit et non putrescit ut mortua, quia 〈quotidie renovatur〉.（なにゆえに魂ある体は生きており，死体のようには腐敗しないのか，それは〈日々更新する〉からである。）——運動（Bewegung）はシュタールにとっては非物体的なものであり，この運動を通して生命原理は体に働きかけ，体の循環と運動において「筋肉繊維」（Fasern）の生命活力（tonicus vitalis）は現象する。

[S.68] 有効な生命原理とは〈霊魂〉（Anima），〈魂〉（Seele）と同じことだ，ということになる主張をシュタールはあえて行ったし，そのような見解への反論を反駁しようともした。しかし少なくとも医者にとっては，そのようなことで論争するとは思われない，と彼ははっきりと主張した。Non opus est ad medicum scopum operose hic disquirere, an vere immediate ipsa anima sit rectrix vitalis actus.（本当に直接的に霊魂自身が生命現象の導き手であるか，それをここで骨折って論じることは，医者の目的にとって役には立たない）*。Principium vitae（生命原理）の意味で彼は時に〈anima〉（霊魂），時に〈natura〉（自然）という語を用いたが，主著の臨床的な箇所の多くでは，通常「自然」という用語が用いられた**。

*Theoria medica vera I, append.（『真正医学説　I, 補遺』）。——シュタールは彼の弟子のユンカーJunckerの著作の前書きで，同様の意見を述べている。——霊魂をあらゆる生命現象のprimum movens（第一動者），最高の規制者とシュタールが見なすようになった理由

の一つには，〈精神的な影響力〉は，刺激を引き起こしたり病的な状態を鎮めたりするが，その場合に比較できないほど短い時間で〈身体の根底的な変化〉を引き起こす，という事情がある。

**生命原理と霊魂を同一視した先行者に〈リヴィエール〉(Rivièr, Riverius)［1589-1655，モンペリエの医学教授］がいる。彼は自然能力（facultates naturales）と生命能力（f. vitales）を，霊魂力（f. animales）と見なした（Instit. med. lib. I, sect. VI, cap. 3)。それに対して〈ヘルモント〉のArcheus（原力)，〈ヴェッパー〉(Wepfer)［1620-95，スイスの臨床医］のPraeses systematis nervosi（神経系の統括者)，〈ウィリス〉(Willis)［1621-75，イギリスの医者，ロイヤル・ソサイティ（1662）設立者の一人］のAnima brutorum（野獣魂）などは先行者とはいえない。というのもそれらは確かに霊魂類似（Psychoide）ではあるが，Anima rationalis（合理的霊魂）とは厳しく区別されなければならない。シュタールの直前の〈ペロー〉(Perrault）は，霊魂が身体のあらゆる現象を支配していることを示そうとしたが，実際は，半ば意識的な反省が，半ば無意識的で習慣となった観念が，身体の動きを決める。(Oeuvres de physique et de méchanique（『物理学力学研究』）, tom. II, pag. 530-535; pag. 593, 594）.——Anima（霊魂）が体を作るということ——すでに〈ガレノス〉が（de format. foet. 『胎児の形成について』）〈プラトン〉流に魂を肉体の〈創造者〉(Demiurgen）と呼んでいた——は，なかでも〈スカリジェ〉(Jul. Caes. Scaliger)［1484-1558，パドヴァで医学を学んだ古典研究者］がはっきりと述べていた。Animi sibi fabricat dentes, cornua ad vitam tuandam, iis utitur et scit, quo sit utendum modo.（霊魂は自らに歯やこぶ（角）を守るべき生体に作り，それらを用い，その用い方が何かを知っている）(Exercit. 307, 29.)

[S.69] シュタールのいう「自然」や「魂」が，明晰な意識を持ち，計算尽くで（ratiocinio）行動したか，それとも無意識で，本能的な意向に従って（ratione）行動したが，そのことをここではこれ以上詮索しない。いずれにせよ，〈身体全体を維持したり，有害物質を予防したり，機能障害が生じたら治癒行動によってそれを除去することなどは，非物質的な生命原理の合目的的な行動に常に起因する〉*。〈自然の治癒現象〉のなかでシュタールにとって最も重要なものは，下剤効果を伴う〈発熱〉のみならず**，ある程度まで〈炎症〉もそうであり，また〈出血〉のみならず〈痙攣〉(Spasmen痙縮, Konvulsionen

全身痙攣）もそうである。

*シュタールによれば，そしてこれは特に強調に値するが，生体を維持するためには，病気でなくとも，〈perpetua therapia interna〉（不断の内科療法）が必要である。その意味するところは，治癒や予防行為は，通常の生命現象を変化させたものに過ぎない，ということである。

**熱病，特に間歇熱，の観察によって，シュタールは自らの理論を導き出した，と自ら述べている。

〈発熱〉をシュタールは分泌や排泄のための生命運動過程と見なし，それによって有害物質が排除される，と考えた*。つまり発熱は彼にとってはmotus corporis conservatorius, damnorum averruncus, alienorum victor, propiorum stator et restaurator（体を保護し，有害物質を避ける運動であり，異物の勝利者であり，より親密な伝令であり復興者）であった。〈炎症〉はそれ自体合目的的で，身体の保持を目的とする生命活動であって，単純な機械的反応ではない，ということを推測する根拠となったのは，鬱血状態から，熱が上がらず他の（炎症性の）症状がなくとも，壊疽に陥ったり，逆に炎症が，進行性で不治で致死的な腐敗から，隣接する部分や身体全体を保護するという間接的な効果を発揮する，という事実であった**。

*ここでTheor. med. vera（『真正医学説』），T. II, P. II, Sect. IV, から多少引用しよう。Enimvero febris in genere omnino tendit ad expurgationem; et quidem rei cujusdam, quae vel magis directe, vel remotius, ad intimam dissolutionem ipsius mixtionis corporeae vergat, imo veluti ruat.（確かに発熱はあらゆる観点からして排泄を目指していると言える。それも，直接的にしろ遠くからしろ，肉体の混合を内奥で解体することに向かうもの，いやそれに向けて突進すると言ってもよい何らかのものを排泄するのである。）

Cum enim febrem considerare liceat, imo vero per veras sui circumstantias deceat, ut ejusmodi actum vitalem motorium, secretorium et excretorium, mediante quo praesentes quaedam noxae removeantur...（というのも，発熱というものを次のように考えることは可能であるし，それを取り巻く真の状況を見てみれば，むしろそのように考えるのが適切だからである。すなわち，発熱とは，動かし，分離し，排出するそのような生命活動であり，それが介入すれば今ある何らかの有害物質が排除される，そのような活動なのである…）

Enimvero haec est utique illa vere medica harum rerum consideratio, atque ratio, quod verae atque sincerae febriles actiones, per successivas secretiones proportionatas et tempestivas excretiones et mediantibus his, per morbidae materiae efficacem depulsionem, ad salutarem vitae conseratorium exitum pertendentes, non solum tolerandae, sed etiam observandae, gubernandae, et quoquo modo juvandae potius atque promovendae sint, quam ullo modo negligendae, nedum pervertendae.（さらに，このようなことを医学的に考え，理屈をつければ次のようになる。真の純粋な熱の振る舞いが，調和のとれた連続的な分離とタイミングのよい排泄によって，そしてそれらを仲立ちとして，病的物質の効果的な撃退によって，生命を守る健康的な結末へ向かって急いでいるときには，そうした振る舞いは，堪えるべきだというだけではなく，保護し，導き，何らかの方法で助けて促進させるべきであって，決して放置したりすべきではないし，ましてや壊すようなことはしてはならない。）

**Theor. med. vera. T. II, P. II, Sect. II, 参照。シュタールによれば，炎症の機械的原因は鬱血であり，鬱血は放っておかれると腐敗に至る。それを防ぐために，活発な自然は，発熱を伴った症状を引き起こし，その結果鬱血を散らしたり，膿に変えたりする。炎症はこのような治癒に役立つ望ましい影響力を持っているが，ささやかならざる障りを伴うことも事実である。特に熱，苦痛，それに加うるに精神的な不安，などの障りは著しい。炎症過程で何が役に立つかを知れば，医者のなすべき業は，鬱血を溶き，体液の過剰を抑え，膿が出そうであれば，膿瘍の出口を確保する，ということぐらいに限定されるであろう。

このような炎症の理解を示した先駆者はヘルモントであり，彼は炎症を，〈自然の治癒努力を伴った神経病〉と説明した。

[S.70]　シュタールの病理学では，主要部分の異常な動きと並んで，鬱血と〈多血〉，特に腹部多血（Plethora abdominalis），が中心的な役割を果たしており，従って彼が〈出血〉（月経，痔出血，鼻血など）を自然の業の予防や治癒の努力として特別に重視したことは当然であり，また出血の様々を出血部位や年齢に応じて詳しく叙述したことも当然であった*。彼は〈鬱血〉を出血に至る合目的的要因と見なしていた**。最後に〈悪寒〉や〈痙攣〉のような緊張性運動の上昇や異常さに関して，それらもシュタールは〈目的的な予防現象とは見なしたが，しかし合目的的といえる場合は極めてわずかであり〉，全身痙攣

(Konvulsionen) のような極端な場合は，自然の救済措置とはいえ，絶望的で成功の見込みのない最後のあがきであると考えた***。

*Theor. med. vera（『真正医学説』），T. II, P. II, Sect. I.

Quod itaque usus illos attinet, quos haemorrhagiae commode succedentes exhibent, certissimum hoc est, et omni verae physiologiae rationi consonum, quod depletiones nimium abundantis sanguinis hoc ipso revera subtrahant, occasionem graviorum sive periculorum restagnationum, stasium, inflammationum, sive damnorum abscessionum aut ipsius sphaceli.（適宜に生じた出血が示すかの効用に関して，次のことは極めて確かであり，真の生理学のあらゆる合理にも一致していることである。つまり，過剰に溢れている血液を空にすることは，より重大な危険があふれ出し，滞留し，燃え上がる可能性，あるいは損傷が減退したり壊疽を起こしたりする可能性を，その者から密かに取り去るのである。）

シュタールは末尾でも（血管の破裂，断裂，切断による）純然たる受動性［静脈性］出血を論じ，パラケルススに依拠しながら，創傷によって生じた出血は，たとえば酩酊状態の場合，すぐに止血するのはよくない，というのもそうすると炎症や他の副作用が生じるかも知れないから，と述べている。

**シュタールは活動性［動脈性］充血を受動性［静脈性］の状態（停滞stagnatio，静止stasis，閉塞obstructio）と区別した。彼は鬱血をリューマチ，炎症，苦痛などとも関連づけた。

***Theor. med. vera, T. II, P. II, Sect. III.

「緊張性」運動上昇の目的は，有害物質の転送や排泄である。緊張性運動には一連の段階があり，鳥肌cutis anserinaに始まり悪寒戦慄に至り，局所的な痙攣や疝痛からてんかん性発作まである。〈局所的痙攣〉についてシュタールは次のように述べている。<Omnes nempe spasmi particulares testantur de conatu quidem aliquo naturae, sed incompleto, et eo ipso ad directum aliquem effectum irrito>.（〈もちろんあらゆる局所的痙攣は，自然の努力のあるものは不完全であり，そのために何か直接的な効果にはつながらないものであることを証明する〉。）

[S.71] シュタールの見解でも決して治癒につながらず，治癒をもたらすと考えてはならないような痙攣について，彼の判断は次の通りである。Patet ex his, <quod directus et perpetuus effectus quarumcunque tandem convulsionum nullus sit

vere et in solidum corpori utilis>, sed omnino utique magis ab irregulari nimia irritatione pendeant vehementes tales conatus; irritatione vero vere moralis destinationis atque scopi, <generaliter quidem omnino boni, nempe quantolibet conatu elidendi noxias corpori materias; speciali vero inventione atque directione utique minus felici atque incongrua>.（これらのことから明らかなように，〈結局どのようなひきつけであれ，その直接的で一般的な効果は，まことに体の固体部分に対しては，全く役立たない〉。むしろそのような激しい努力は，不規則な過度の刺激に全面的に左右されるのである。その刺激というのは，真に道徳的な決定や目的を持ったものであって，〈体に有害な物質を排除しようとする努力がいかに大きなものであっても，概して全く善良な目的を持ったものである。しかし，それが特別な独創や方向付けが加わると，あまりよろしくない不適切な刺激となる〉。）

シュタールのように，〈自然〉（Physis）を〈霊魂〉（Anima）と同一視する傾向のある思索家なら決して困難なことではないが，〈彼は自然の治癒の業のなかでも，追い求めた目的を逸するものも，あるいは，単に不完全であるだけでなく，馬鹿げており目的に反するものさえある〉，ということを認めるにやぶさかではなかった。というのもシュタールにとって有機体とは，創造者の叡智によって強制的に機能する保護機構を備えた機械ではなく，欠点や弱点，欠陥を備えた人間の魂（Seele）が体を作り上げ，健康なときも病気のときも生命を導く，と考えたのだから，魂の治癒の営みはときに弱すぎたり，不活発であったり，慌てすぎたり，危険であったり，的はずれだったりあるいは馬鹿げていたりもする，という結論が出ても不思議ではなかった。繰り返してシュタールははっきりと歯に衣着せず指摘している，「〈人間の中の自然〉は，ことに誤謬や過剰に陥る傾向があり，短気や，性急さ，逡巡，恐怖や不安，長引く悲哀や時宜を得ない安逸，大胆と消沈の不規則な交代，などによって〈目的に反した行動〉へと導かれる」と*。

*Theoria medica vera, Tom. I, Vindiciae et judicia de suis schediasmatibus（それらの即興的言動に関する請求権と裁判）. Vgl. auch Tom. II, P. I, Sect. IV, membr. III; Tom. III, Sect. II, membr. III art. III. シュタールが言及しているのは，acutus erronei, praecipites, turbulenti,

nimium anxie exerciti,（錯誤的，予防的，混乱した，極度に不安で煩わされた［？］，行為）あるいはtrepidae vel etiam impatientes perversiones（落ち着きがなく性急な倒錯），あるいはrepentini defectus energiae conservatricis vitalis（生命を保存するエネルギーの突然の欠乏），あるいはdesperabundae necessariae activitatis omissiones（必要な行為の絶望的な省略［？］）などであり，彼の見解を次のように要約している。Illud unum superest monendum, quod nemo neque nobis imputare debeat, neque sibi praefigurare, quasi agens nostrum autocraticum proporitones has semper ita mechanice et mathematice instituat, ut nihil faciat, nisi quod cum objecti, contra quod nititur, conditione examussim quadret. Nequaquam. Sed tumultuatur utique saepisime, et non modo impetu erroneo agit, modo nimis trepide, modo praecipitanter; sed etiam subinde in specialibus organis recte selegendis aberrat, et per incongruas vias secretiones et excretiones suas moliatur.（唯一忠告すべきこととして残るのは，いかなる者も次のようなことを我々に押しつけてはならないし，自らに予示してはならないということである。すなわち，我々の自律的なメカニズムを動かすものは，常にこの関係を機械的に数学的に構成しており，そのため，努力を傾ける対象の状態にぴったりと釣り合うこと以外は何も行わない，というようなことである。決してそんなことはない。それは極めてしばしば混乱することがあるし，過度におびえたり，向こう見ずになったりして，誤った衝撃を加えて動かすことがあるだけではなく，特定の器官を正しく選択することにおいても突然過ちを犯し，不適切な方法によって分離と排出を行おうとすることもある。）

[S.72] しかし〈シュタール学説の中心理念である，病気とは侵入した害毒に対する自然の闘いの現れであり，病気の圧倒的多数は有機体の治癒努力の現れである，という考え方〉は終始一貫変わるところがなかった。

症状はしばしば患者の主観的な愁訴を伴い，時には危険な場合もあり，それゆえ病気の原因物質が直接悪さをしているのではないか，という素朴な見解が広く広がっているが，シュタールはこのような見解に繰り返して反対し，実際には直接毒物のせいで生じた症状は極めて僅かでしかない，と主張している*。

*Agnosci poterit, quod mutae ejusmodi res, qua vulgus etiam medentium pro directis morborum effectibus physicis habet, quae symtomata audiunt, magno numero potius ipsius energiae conservatoriae veri directi actus existant, praeoccupandis et in futurum praeservandis aliquibus pericli-

tationibus dicati, quibus ita potius progressum planiorem reddere deceat, quam ipsos pro vere morbidis sive actibus, sive effectibus interpretari.（次のように考えることが可能になるだろう。医者たちの多くでさえもが病毒の物理的な作用と見なし，「症状」と呼ばれている，そのようなたくさんのもの。実はその大部分がむしろ［病者を］保護するエネルギーの真に直接的な働きとしてあるのであり，何らかの試みを先取りして将来のために取っておくことに専念しているのである。そうした試みは，病気の作用，あるいは病気の効果として解するよりも，むしろそれらのおかげで前進がより明瞭になると考える方がふさわしい。）

Comprehendit sane sub se hic respectus paradoxon illud: quod multi insoliti actus in corpore humano contingant, quos vulgus hominum pro morbis et directis morbidis effectibus accusat, qui rem penitius considerando potius ita salutaris sunt efficaciae, ut, si non fierent et quotiescunque in reliqua tali constitutione non fiunt, longe adhuc majus atque gravius periculum et liberior et inde etiam promtior consecutio damnorum inde resultet.（このような見方は次のような逆説を自らの内にはらんでいる。多くの異常な動きが人体において生じるとき，それを多くの人は病気や，病的なものの直接的な影響だと見なして非難する。が，物事をより深く考えるならば，それはむしろ健康のためになる作用なのであって，もしもそのような動きが生じないならば，また，まだ行われていないそのような調整において，そのような動きが生じない場合は必ず，それ以上はるかに大きくて重大な危険がより易々と跳ね返ってくるのであり，また，そのために損害が継続してさらに進行して起こるのである。）

Moneo itaque atque cohortor, ut haec res inter pathologiae medicae solida fundamenta reponatur: vera inquam et exacta omnino distinctio inter ejusmodi actus atque motus in morbis, qui ab energia ipsa Naturae pendentes salutarem aliquem usum praestare possunt, imo passim unice debent, interim necessario secum ferunt, aliquas circumstancias ab ipso ordinario habitu actuum in corpore alienas.（従って，私が忠告すると同時に励ますことは，以下のことを医学における病理学の中にしっかりした基礎として置くようにということである。次に述べるような動きと病気における運動との間の区別は，全く本物であり正確なものであると言いたい。その動きとは，自然のエネルギー自体によるものであり，健康をもたらす何らかの効用を与えうる，いや必ず与えるはずのものであるが，そうしている間に必然的に，動きの体内における普段の振る舞いとは異なる何らかの状態を引き起こすのである。）

Ubi nempe simplex historia, nempe nuda experientia, utique manifestum reddit, quod plero-

rumque, imo omnium illorum morborum, qui non simpliciter a rudi violentia externa proficiscuntur, nulla usquam sit directa atque simplex potestas in corpus humanum: Sed quod potius omnes morbi tantam ab oeconomia vitali reactionem perpeti necesse habeant, ut hujus activitate etiam sine alio adventitio artificiali adminiculo, ipsi quidem morbi subigantur, expugnentur, ejiciantur. Corpus autem, non solum ad antiquam oeconomiae suae regulam revertatur, sed etiam in ipsam texturae suae atque structurae integritantem, sicubi illa violata fuerit, restituatur atque reparetur.（つまり単純な歴史にしても素朴な経験にしても極めてはっきりと示しているところであるが，単純に外部の粗野な暴力に引き起こされたのではないような，たいていの，いやすべての病気は，どれ一つとして人体に対する直接的で単純な勢力とはならない。むしろあらゆる病気は，生命活動から受ける反応を堪え忍ばねばならないのであって，その反応は強いものであるから，他の人為的な補助を付け加えなくても，その生命活動の活発さのために病気は退治され，排除され，駆逐される。そして体は元の生命活動の規則に戻るだけではなく，もしもどこかでその規則が犯されたなら，組織や構造が完全になるよう修復され修繕されるのである。）

先人たちの中には自然治癒の働きを鋭敏に見抜き，自然治癒過程は病気という被いに隠されている，という見解に達したものもいたが，〈シュタール〉ほど集中的にしかも広範囲にわたって，特殊な病理学の全領域を渉猟し，有機体の治癒反応の結合や連続の形態を明らかにしようとした人はいなかった*。それゆえシュタールにおいてもかの［自然治癒力重視という］原則は，どうでもよいような付録ではなく，彼の体系の必然的な帰結であった。

*シュタールは〈慢性症状〉，においても自己救済の現れを見て取ろうとした，もっともここでは急性症状の場合よりも自然のエネルギーは少ない，と見なした。

[S.73] シュタールにとっては，自然の治癒の業を認識し，注意してそれを支えることは，医者の義務であった。彼は怠惰な傍観者としてではなく，良心的な観察家として病床に臨み，あらゆる事情を注意深く綿密に考慮した上で，必要ならば病気の経過に介入しようとした。その意味で彼は〈待機的な治療〉(eine exspektative Therapie) を自ら行いまた推薦したことになる。それは確かに当時の大部分の医者たちの多療多診（Polygramasie）とは鋭い対照をなすが，

しかしだからといって活発でない（inaktiv）というのでは全くなかった。彼は事態の深刻さをユーモアで味付けして，イギリスの医者〈ハーヴィー〉(Gideon Harvey) の皮肉なThe art of curing deiseases by expectation（『待機療法による病気の治療術』）の新版，正確にはそのラテン語訳，をシュタール自身の治療原則を補足として付け，〈Ars curandi nuda expectatione〉（待機なき治療術）に対して〈Ars sanandi cum expectatione〉（待機を伴う治癒術）を強調して，出版した。（挿絵省略）

シュタールの「霊魂論」と治療方針は，ドイツの医師たちの中に急速に熱狂的な支持者を見出したが，数と能力においてはるかに優る批判者たちを打ち倒すには，全く不十分であった。シュタールの体系は様々に修正され，偏りや誇張を除去されて初めて影響を与えるようになったが，その修正は主としてイギリスやフランスの医者たちのおかげであった。

ドイツのもっとも初期の支持者や弟子に当たる人たちには，〈カール〉（J. S. Carl）*，〈コシュヴィッツ〉（Coschwitz），〈ゴール〉（Gohl），〈アルベルティ〉（Alberti）**，〈ゲーリケ〉（Goelicke），〈ユンカー〉（Juncker）***，〈ネンター〉（Nenter）などがいる。[S.74]彼らの中には，独創性が十分でなかったり批判力が全くなかったり，極度の神秘主義と不寛容な頑固さとが合わさっているような人もいた****。

*〈カール〉は彼のPraxeos medicae therapia generalis et specialis（『実地医療のための一般的・特殊的治療法』）において，生きた生命原理である魂（Seele）は，体液の腐敗と身体の破壊に対して，循環と緊張運動によって対抗する，拍動は熱を生み，緊張運動は過剰血液を減少させる，という見解を支持している。彼によれば発熱は，発熱に伴う排泄によって腐敗に対処するという目的を持ち，炎症は鬱血を除去し，痙攣は体液の鬱積を終わらせる。——Specimen historiae medicae etc.（『医学史の理想』）において彼は，自然救済の現象を正確に観察することを勧め，その現象を機械的に説明することを否定した。

**ハレ大学教授〈アルベルティ〉は，多数の論文でシュタールの学説を様々の領域にわたって擁護し，〈治りにくいすべての病気において痔出血が治癒効果を持つ〉と強固に主張した。

***ハレ大学教授。自らの著作以外に多数の論文がある，たとえば〈De utilitatibus dolorum〉（『苦痛の効用について』）など。
****弟子たちは師のシュタールよりもはるかにとげとげしくキナ皮の適用について弾劾判決を下した，たとえば〈カール〉，〈ユンカー〉，〈マダイ〉（Sam. Madai）。特にマダイは発熱を，どんな時にも常に役立つ自然の治癒行為だと説明した。

シュタールの二人の偉大な敵対者にはホフマン（Friedrich Hoffmann）とかの哲学者〈ライプニッツ〉［1646-1716］がいた。

ライプニッツは動力（bewegende Kraft）と物質との分離を批判し，まさに医学において化学と物理学による因果的研究を緊急の課題と見なした。ここではTheoria medica vera（『真正医学説』）への詳細な批判の幾つかを抜粋しよう。

Etsi enim fons omnis actionis proximus sit in anima, ut passionis in materia; non tamen putandum est, animam per suas operationes insitas, perceptionem scilicet et appetitum, vel minimum corpus a legibus suis mechanicis dimovere...ita in corpore organico viventis, cui anima tanquam rector peculiaris praeest, <etsi omnis actionum fons sit in anima, nihil tamen fit praeter corporis leges...>（ほとんどすべての能動の源は，受動の源が物質の中にあるように，霊魂の中にある。そうであるとはいえ，霊魂がその生来の働き，すなわち表象と欲求によって，体をその機械的な規則に背かせるなどとは全く考えるべきではない。そのように，霊魂があたかもその専門指揮者のように導いている生体の有機体においては，〈能動のあらゆる源が霊魂の中にあるとはいっても，体の規則なしには何も生じないのである〉。）

Dicique possit, <corpora naturae organica revera machinas divinas esse...nihil in corpore fieri, quod non mechanicis, id est intelligilibus rationibus constet>.（〈自然の有機的な体は神的な機械である。。。機械的な動因，すなわち合理的な動因に調和しないものは，何一つ体の中で生じない〉，と言ってよいだろう。）

Et licet non possit Chirurgus ossa, vasa, musculos, nervos aut membranas laesas resarcire, ut sartor vestimentum, sed hoc naturae opus sit, non ideo tamen exiguum est, ossium, vasorum, musculorum, tendinum, nervorum, membranarum figura, situm,

nexum exacte nosse, ut scilicet laesione facta caveantur, <quae impediunt naturae actionem, procurentur, qua juvent...> Et dici potest, corpus nostrum non tantum machinam hydraulico-pneumaticam, sed et pyriam esse.（外科医は骨，脈管，筋肉，神経，傷ついた皮膚などを，仕立屋が衣服を修復するようには，修復できない，むしろそれは自然のなす業である。とはいうものの，だからといって，骨，脈管，筋肉，腱，神経，皮膚などの形，場所，つながりを正確に認識することは決して小さなことではない。すなわち，そうすることで損傷を受けたときには〈自然の業を阻むものに警戒し，それを有益な方向にもっていくよう配慮する〉ということである。…我々の体は単なる水力・風力の機械ではなく，同時に火力の機械でもある，と言える。）

monstro simile videtur cl. autori, motus ex vitali censu, tam sanos quam morbosos, non esse in potestate animae. Erunt contra (credo) plures, quibus monstro simile videbitur, eousque animae potestatem extendi...（生命から生じる運動，それも病的な運動と同様に健康的な運動が，霊魂の力の及ぶ範囲にないと考えるのは，筆者には奇妙な考え方だと思われる。それに対し，霊魂の能力をそれだけ拡大することを，奇妙だと思う人は――私はそう信じるが――多数いるであろう。）

Quod si anima potestatem haberet in machinam, ut imperare aliquid posset non sponte facturae, jam nulla ratio foret, cur non imperare quidvis posset...<essetque jam natura> (id est, anima secundum cl. autorem) <efficacissima malorum omnium medicatrix, nec scopo suo unquam excideret>.（もしも霊魂が機械に対して力を持っており，自発的には行為しない機械に何かを命令することができるとしたら，なぜ何も命令できないのかという疑問への解答は全くないであろう... また，〈そうすれば自然（つまり筆者によれば霊魂のことであるが）はあらゆる害毒のもっとも効果的な治療者となるであろうし，自分の目的を失うこともないであろう〉。）

Corpus animale esse machinam-pneumatico-pyriam... vix quisquam amplius dubitat, nisi chimaericis principiis animum occupatum habeat, veluti animabus divisibilibus, naturis plasticis, speciebus intentionalibus, ideis operatricibus, principiis hylarchicis, archaeis aliis, quae nihil significant, <nisi in mechanica resolvantur>.

(霊魂のある体は風－火による機械であるということ，…もしも霊魂がキマイラのような原理に支配されていると考えないかぎり，そのことを誰もそれ以上疑うことはない。すなわち，キマイラのような原理とは，分割可能な霊魂，可塑的な自然，意志を持った形象，活動的なイデア，物質支配的な原理，そしてその他の根元的な原理のことであり，それらは〈メカニズムの中で解明されなければ〉何の意味もないものである。)

Nempe anima non potest violare leges naturae corporeae, nec corpus leges animae... <Anima quidem est Entelechia corporis animati, sed ita , ut omnes operationes in corpore mechanice exerceantur...> (もとより霊魂は身体となった自然の規則を犯すことはできないし，身体は霊魂の規則を犯すことはできない…。〈霊魂は確かに霊魂ある体の完成態（エンテレケイア）であるが，ただし，体におけるあらゆる働きが機械的に働くような，そのような仕方でそうなっているのである〉。)

Non video, cur anima semper corpori suo timere debeat. (なぜ霊魂が常にその体を怖がらなければならないのか，私には分からない。)

Animadversiones circa assertiones aliquas Theoriae Medicae verae Clar. Stahlii.--Responsiones ad Stahlianas observationes (Leibnitii opera omnia ed. Duntens 1768, Tom. II, Pars II pag. 131-161) . (シュタールの『真の医学理論』の若干の主張に関する吟味。――シュタールの観察への反駁（『ライプニッツ全集』，ドゥンテンス，1768年，第2巻，第2部，131-161頁)